

浄土教と戒

龍 口 明 生

はじめに

阿弥陀仏信仰と戒、特に八斎戒との関係については、『大阿弥陀経』及び『観無量寿経』に言及されている記述について既に論及したが、本稿では現存する五種の漢訳無量寿経、即ち『大阿弥陀経』・『平等覚経』・『無量寿経』・『如来会』及び『莊嚴経』において、戒を受持することが、悟り・往生の因として如何に位置付けられているかに注目してみたい。浄土教が成立・発展して、確立するに従い、行は念仏が中心となり、その他の行は重要さを失つて来る。しかしながら阿弥陀仏信仰が拡まる過程にあつては、仏教教団の他の信仰集団との関わりにおいて、斎戒・諸戒の受持ということは無視できない。特に伝道という面より検討するとき、在家仏教徒の布薩である八斎戒は大きな意味を持つている。

以下、所謂五悪段に説かれる斎戒、そして上輩・中輩及び下輩に説かれる斎戒について考察する。

一 五悪段における斎戒受持

無量寿経五本の中、五悪段が説かれるのは『大阿弥陀経』・『平等覚経』・『無量寿経』の三本であつて、『如来会』及び『莊嚴経』には該当箇所は無い。¹⁾

まず『大阿弥陀経』について、

仏言。若曹於是益作諸善。布施福德能不犯道禁忌。忍辱精進一心智慧。展転復相教化作善為徳。如是経法。慈心専一斎戒清淨一日一夜者。勝於在阿弥陀仏国作善百歳。所以者何。阿弥陀仏国皆積徳衆善。無為自然在所求索。無有諸惡大如毛髮。仏言。於是作善十日十夜者。其徳勝於他方仏国中人民作善千歳。所以者何。他方仏国皆悉作善。作善者多為惡者少。皆有自然之物。不行求作便自得之。是間為惡者多作善者少。不行求作不能令得。世人能自端制作善至心求道。故能爾耳。

(大正十二・三二五頁下)

とあり、作善として六波羅蜜及び斎戒の受持が説かれる。慈心にて専一に八斎戒を一日一夜受持することは、阿弥陀仏国

にあつて百年間善行を作すことよりもその功德が勝れている。その理由は阿弥陀仏国土においては皆が徳を積み、衆善を作し、悪を作す環境ではないからである。それに反しこの娑婆世界においては悪を作す者多く、善を積み、悟りを求めることは甚だ作し難いからである。同様に十日十夜の齋戒受持の功德は、他方仏国において千年間の作善の功德よりも勝れていると説く。なおこの五悪段は、阿弥陀仏信仰を受容していない人々への教えである点に留意しなければならない。⁽²⁾

『平等覺經』も『大阿弥陀經』と同じく六波羅蜜及び八齋戒の受持を説く。『無量壽經』も亦同様である。

ところで前述の如く『如来會』と『莊嚴經』とは、この五悪段は説かれてはいない。何故説かれていないのか。諸經典の成立、翻訳等の面から、すでに多岐にわたり種々なる論が示されて来た。⁽³⁾一つの推測として、伝道の面から考えるならば次の如く言えよう。『如来會』・『莊嚴經』が流布した地域・時代には、阿弥陀仏信仰が広く浸透し、五悪段を説く必要の無い地域乃至は時代であつたと。これ等二經典が漢訳される以前であつたか、漢訳時であつたかは定かではないとしても。換言するならば『大阿弥陀經』・『平等覺經』或いは『無量壽經』に基づき阿弥陀仏の教えを弘めんとする地域には、すでにその地に六波羅蜜を行じ八齋戒を受持している仏教徒が居住していた。彼等の中の一部の者は新たに入つて来

た阿弥陀仏の教えを拒否する者達であつたことが考えることができる。

二 上輩について

『大阿弥陀經』には、

最上一輩者。当去家捨妻子斷愛欲。行作沙門。就無為之道。当作菩薩道。奉行六波羅蜜經者。作沙門不斷經戒。慈心精進不當瞋怒。不当与女人交通。齋戒清淨。心無所貪慕。至誠願欲往生阿弥陀仏国。常念至心不斷絶者。其人便於今世求道時。即自然於其臥止夢中。見阿弥陀仏及諸菩薩阿羅漢。其人寿命欲終時。阿弥陀仏即自与諸菩薩阿羅漢。共翻飛行迎之。則往生阿弥陀仏国。

(大正十二・三〇九頁下〜三二〇頁上)

とあり、第一輩は出家して菩薩道を実践する者であり、六波羅蜜行を奉行し、不姪戒を持つ者である。そして齋戒清淨にして貪欲無きことを説く。断るまでもなく、八齋戒は在家仏教徒の布薩である。ところが「去家捨妻子斷愛欲。行作沙門」とあり、明らかに出家者である者が八齋戒を受持する。このことは在家者の布薩に出家者も加わり、共に八齋戒を持するという形の布薩なのであろうか。八齋戒にも諸種の形が存在するので、そのような可能性は充分考えられよう。⁽⁴⁾上輩とは出家者であつて六波羅蜜を行じ八齋戒を受持し且つ阿弥陀仏国への往生を願う者である。『平等覺經』に説く第一輩も「大

阿弥陀經』に説くところと同一であり、齋戒清淨に言及するところで『無量寿經』には出家して沙門となる点では合致しているけれども、六波羅蜜及び齋戒受持に関しては具体的には挙げず、「諸の功德を修する」と述べるにとどまる。

其上輩者。捨家棄欲而作沙門。發菩提心。一向專念無量寿仏。修諸功德願生彼国。（大正十二・二七二頁中）

「諸功德」の中に六波羅蜜を行ずること、八齋戒を受持することを含むか否かは明確ではない。一方「一向專念無量寿仏」と阿弥陀仏信仰が強調されている。

次に『如来会』及び『莊嚴經』には「第一輩」或いは「上輩」という語は使用されていない（中輩・下輩の段も同様である）。けれどもそれぞれに相当する箇所はある。

『如来会』には、
若有衆生。於他仏刹發菩提心。專念無量寿仏。及恒種植衆多善根。發心迴向願生彼国。（大正十一・九七頁下、九八頁上）

とあり、「衆多善根」を種植すると言っているけれども具体的に何をすることが作善かは明示されていない。

『莊嚴經』では、
若有善男子善女人。聞此經典受持誦書寫供養。晝夜相統求生彼刹。（大正十二・三三三頁中）

と言ひ、作善はこの『莊嚴經』を聞き、受持し、誦誦・書寫して供養することを説く。

以上の如く、『無量寿經』・『如来会』・『莊嚴經』の上輩では六波羅蜜・齋戒は説かれない。その反面、阿弥陀仏信仰がより一層強調されてくる。

三 中輩について

『大阿弥陀經』・『平等覺經』・『無量寿經』に於いては、中輩とは出家し沙門となることのできない在家仏教徒である。一方『如来会』・『莊嚴經』では在家・出家の區別なく、兩者を含むものである。

『大阿弥陀經』では、

其人願欲往生阿弥陀仏国。雖不能去家捨妻子斷愛欲行作沙門者。當持經戒無得虧失。益作分檀布施。常信受仏經語。深當作至誠中信。飯食諸沙門。作仏寺起塔。散華燒香然燈。懸雜繒綵。如是法者。無所適莫。不當瞋怒。齋戒清淨。慈心精進。斷愛欲念。欲往生阿弥陀仏国。一日一夜不斷絶者。（大正十二・三一〇頁上）

とあり、齋戒清淨と共に、布施・造寺・起塔・散華・焼香・燃燈等の諸善を併せ行い功德を積む。『平等覺經』も同種の作善を説く。『平等覺經』には、

其人願欲往生無量清淨仏国。雖不能去家捨妻子斷愛欲行作沙門者。當持經戒無得虧失。益作分檀布施。常信受仏語深當作至誠中信。飯食沙門。而作仏寺起塔。燒香散華然燈。懸雜繒綵。如是法者。無所適貪。不當瞋怒。齋戒清淨慈心精進斷欲念。欲往生無量清淨仏国。一日一夜不斷絶者。（大正十二・二九二頁上）

右の両經典とも清淨齋戒受持することは一日一夜であるが、単に八齋戒を持つのみではなく、無量清淨仏国への往生を願いつつ厳守するのである。

『無量寿經』には、

十方世界諸天人民。其有至心願生彼国。雖不能行作沙門大修功德。当發無上菩提之心。一向專念無量寿仏。多少修善。奉持齋戒。起立塔像。飯食沙門。懸繒然燈。散華燒香。

(大正十二・二七二頁中、下)

と言ひ、ほぼ『大阿弥陀經』・『平等覺經』と同一である。次に『如来会』では、

若他国衆生發菩提心。雖不專念無量寿仏。亦非恒種衆多善根。隨已修行諸善功德。迴向彼仏願欲往生。

(大正十一・九八頁上)

とあり、常に多くの善根を植えるわけでもないが、諸善の功德を修すると説く。特に注目すべきは、『無量寿經』が「一向專念無量寿仏」と言うのに対し、この經典では「雖不專念無量寿仏」と言っている点である。

『莊嚴經』は、

若有善男子善女人。發菩提心已。持諸禁戒堅守不犯。饒益有情。所作善根悉施与之。令得安樂。憶念西方無量寿如来及彼国土。

(大正十二・三三三頁中)

と言つて諸の禁戒を持つことを述べるが、八齋戒であるか否かは不明である。ともあれ禁戒受持の功德を説く。そして西

方の無量寿如来及びその仏の国土を憶念することを説く。

四 下輩について

『大阿弥陀經』の第三輩について、

其人願欲往生阿弥陀仏国。若無所用分檀布施。亦不能燒香散華然燈。懸繒繒綵。作仏寺起塔。飯食諸沙門者。當斷愛欲無所貪慕。得經疾慈心精進。不當瞋怒。齋戒清淨。如是法者。當一心念欲往生阿弥陀仏国。昼夜十日不斷絶者。

(大正十二・三一〇頁下)

とある。布施することも出来ず、焼香・散華・燃燈や繒綵を懸けること、造寺・起塔・出家者への食を布施することができなくとも、愛欲を断ち、貪慕なく、慈心にて精進し、瞋怒せず、齋戒清淨にして一心に阿弥陀仏国への往生を欲することを説いている。

『平等覺經』も『大阿弥陀經』と同じく齋戒清淨なることを説いている。

『大阿弥陀經』及び『平等覺經』には共に「昼夜十日不斷絶」とある。これは齋戒を昼夜十日受持するのか阿弥陀仏国への往生を一心に念ずることを昼夜十日するのか、両方の解釈が可能であろうが、通常の齋戒は一日一夜であるが、多種の齋戒の中には十日十夜或いはそれ以上の期間のものもある。往生を一心に念じつつ齋戒受持すること、昼夜十日と理解すべきであろうか。前の中輩の『大阿弥陀經』・『平等覺經』

の「一日一夜不斷絶」も阿弥陀仏国への往生を欲しつつ齋戒受持一日一夜と理解した。

ところで『無量寿経』では、

十方世界諸天人民。其有至心欲生彼国。假使不能作諸功德。当發無上菩提之心。一向專意乃至十念。念無量寿仏願生其国。若聞深法歡喜信樂不生疑惑。乃至一念念於彼仏。以至誠心願生其国。

（大正十二・二七二頁下）

と、たとえ諸の功德を作すことがなくとも、無上菩提心を発し、一向專念に無量寿仏国に往生することを願うことを説いている。ここでは齋戒清浄なることには言及されていない。

『如来会』も、

若有衆生住大乘者。以清浄心向無量寿如来。乃至十念念無量寿仏願生其国。聞甚深法即生信解。心無疑惑乃至獲得一念淨心。発一念心念無量寿仏。

（大正十一・九八頁上）

とある如く、清浄心で以て無量寿如来に向かい、無量寿仏を念じ仏国への往生を願うことを説く。ここには諸の作善も齋戒受持も説かれていない。

『莊嚴経』では、

若有善男子善女人。発十種心。所謂一不偷盜。二不殺生。三不婬欲。四不妄言。五不綺語。六不惡口。七不兩舌。八不貪。九不瞋。十不癡。如是晝夜思惟極樂世界無量寿仏。種種功德種種莊嚴。志心帰依頂礼供養。

（大正十二・三三三頁中）

と、十善を作すことを説き、無量寿仏への帰依、供養を説く。齋戒受持ではないけれども十善を説いていることは、『大阿弥陀経』や『平等覚経』に類似していると言えよう。

五 各經典の同異

以上、無量寿経漢訳五本の三輩段について、特に齋戒受持に注目してみた。今一度これ等を要約し、伝道的側面より特色をうかがってみた。

まず齋戒受持の点より。『大阿弥陀経』の五悪段では齋戒清浄一日一夜が説かれ、上輩についても齋戒清浄を持つことを説く。中輩も経戒を固く守り齋戒清浄なることを説く。下輩についても同様に齋戒清浄の受持を説いている。阿弥陀仏信仰を拒否する五悪段に説かれる仏教徒のグループ、上輩・中輩・下輩の三種の阿弥陀仏信仰者のグループ、計四つのグループ共に齋戒を受持していることが知られる。『大阿弥陀経』が流布していたある時代の、ある地域は種々なる仏教徒のグループが存在していたけれども、毎月六回の布薩を催していたという点は四種のグループに共通して言えることである。阿弥陀仏信仰伝播の最初期について言えば、ある地域に何等かの点でそれぞれ相違を有する四種の仏教徒のグループがあり、その地に阿弥陀仏信仰が伝道された。その中の一つのグループは阿弥陀仏信仰の導入を拒絶した。これが五悪段

に説かれるグループである。他の三グループは阿弥陀仏信仰を採用した。それが、上輩・中輩・下輩の三グループであり、その三者の相違はグループ本来の特性に基因する、或いは阿弥陀仏信仰導入に際しての積極的姿勢・消極的姿勢等の相違を反映したものと見えよう。

次に『平等覚経』について言えば、五悪段及び上輩・中輩・下輩の三輩いずれに於いても斎戒の受持を説く。この点『大阿弥陀経』と一致する。その他の作善についても同一の傾向を示している。

『無量寿経』については、五悪段では斎戒受持を説く。三輩往生については中輩のみに斎戒奉持を説いており、上輩・下輩については斎戒への言及は無い。ただ上輩は出家者であるから、何等かの出家戒を持っていたことは当然考えられる。少なくとも下輩は斎戒を受持してはいない。このことは『無量寿経』に基づき伝道するこの地に於いては、布薩に参加しない、或いは布薩の習慣を持たない仏教徒が存在していたことを意味する。彼等は布薩に参加しないという点では消極的な仏教徒であつたとみなすことも出来ようが、反面阿弥陀仏信仰者としては積極的な仏教徒であつたと理解することも可能である。

『如来会』では五悪段は説かれていない。このことは『如来会』が流布した時代、そしてその地域に於いては、仏教徒で

あつて阿弥陀仏信仰を拒絶するグループは存在しなかつたと考えることが出来ようか。上輩・中輩・下輩と三様の仏教徒グループがあり、全て一色ではないけれど、少なくとも阿弥陀仏信仰を否定する仏教徒はいなかつた。更に言うならば、この地に阿弥陀仏信仰が伝道され、時間の経過と共に大多数の人々が阿弥陀仏教徒化された。その結果、阿弥陀仏信仰を拒否する仏教徒の爲の五悪段の教えの必要性が無くなり、『如来会』よりこの一段を脱落せしめたと推測することが出来る。また『如来会』の三輩の中、上輩は多善根を説くけれども斎戒受持については述べていない。中輩・下輩については、斎戒受持とは何等の関係も有してはいない。このことは五悪段の欠除と共に、この地域における阿弥陀仏信仰の浸透の度合の深さを物語っている。

『莊嚴経』も五悪段の欠除という点では『如来会』と軌を一にする。従つてこの經典に拠る伝道教化の地域も、仏教徒の中で阿弥陀仏信仰を積極的に否定するグループは存在しなかつたであらうことが知られる。ただし『如来会』が三輩にわたつて持戒の面で消極的であつたのに反し、この『莊嚴経』では中輩の禁戒堅守を説き、下輩の十善を説く点で相違を見せている。しかしながら中輩段で本経（『莊嚴経』）の受持・読誦・書写供養を強調している点は、阿弥陀仏信仰の隆盛の一端をうかがわせる。

むすび

以上、無量寿経の漢訳五本の五悪段及び三輩往生について、伝道という面から斎戒との係わりに注目し検討した。各経典の一部のみを取り上げ全体を論ずることは危険である。従って右に述べた如きはあくまでも一つの推測でしかない。阿弥陀仏信仰に限らず、新興の教えが伝道される場合、既存の宗教との接触を避けることは出来ない。在家仏教徒の仏教的行事と言え、毎月六回催される在家者の布薩、八斎戒である。この八斎戒自体もすでに他の仏教修行・作善が加わり、諸種の斎戒が成立、実践されていた。その諸種の八斎戒に阿弥陀仏信仰が接触することにより各地に多様な阿弥陀仏信仰が出現する。無量寿経の漢訳五本の同異はこの痕跡を示しているものと言えよう。

- 1 五悪段及び三輩段の諸本の比較対照箇所については香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』（永田文昌堂、一九八四年）に拠る。
- 2 この点については、龍口明生「無量寿経の「五悪段」と在家者の布薩」（『真宗研究』第四十四輯二〇〇〇年一月）
- 3 藤田宏達『原始浄土教思想の研究』（一九七〇年・大田利生『無量寿経の研究―思想とその展開―』（一九九〇年、永田文昌堂）
- 4 龍口明生「在家仏教徒の布薩の諸形式」（『印度学仏教学研究』

第五十巻第二号二〇〇三年）

〈キーワード〉 無量寿経、三輩往生、五悪段、斎戒、布薩

（龍谷大学教授）

新刊紹介

古稀記念論文集刊行会編

村中祐生先生古稀記念論集

『大乘仏教思想の研究』

B五版・九六〇頁・定価二五、〇〇〇円
山喜房佛書林・二〇〇五年六月

115. The Teachings of Pure Land and Upholding the Eight Prohibitory Precepts

Myosei TATSUGUCHI

Previously I have investigated the relationship between faith in Amida Buddha and the precepts, especially the connection to the Eight Prohibitory Precepts as they are portrayed in the *Da Amituo jing* (『大阿弥陀經』), the *Wuliangshou jing* (『無量壽經』) and the *Guan Wuliangshou jing* (『觀無量壽經』). Upholding the precepts is discussed in five extant Chinese translations of the Larger Sutra of Immeasurable Life (無量壽經): the *Da Amituo jing* (『大阿弥陀經』), the *Wuliang qingjing pingdengjue jing* (『無量清淨平等覺經』), the *Wuliangshou jing* (『無量壽經』), the *Wuliangshou rulai hui* (『無量壽如來會』), and the *Dacheng wuliangshou zhuangyan jing* (『大乘無量壽莊嚴經』). The topic I wish to consider in this article is whether these precepts are a primary factor for awakening or for birth in the Pure Land, and how they came to have this status. Along with the development, spread and establishment of the teachings of Pure Land, the practice of reciting the name of the Buddha was emphasized, to the detriment of other practices. As faith in Amida spread, however, for the sake of good relations with other faiths and institutions, the question of upholding the precepts could not be ignored. From this point of view, upholding the precepts, especially the Eight Prohibitory Precepts, are important to the transmission of the teaching of Pure Land Buddhism.

116. Zhixu and Zhiyuan's Commentaries on the *Shoulengyan jing*

Eiki IWAKI

The purpose of this article is to clarify the thought of Zhiyuan of the Song dynasty and Zhixu of the Ming dynasty, by comparing their commentaries on the *Shoulengyan jing*. Zhiyuan regards *zhenxin* (真心) as of greatest import from his *weixin* (唯心) principle, and often uses the concepts of *zhen* (真), *wang* (妄), *zhong* (中) in his commentary. Zhixu often uses *kong* (空), *jia*